

最優秀賞

「ボクの家族」

ちねん はやお
沖縄県 知念 駿さん 高校3年生

水曜日の夜、僕は家族みんなが使った皿を洗う。ベタベタするし、少しにおう。僕は好きな音楽なしでは皿洗いを続けられない。そんな皿洗いを母さんは週6やる。

土曜日の朝、僕は家族の服を干す。夏はとても暑いし、冬は手が死にそうになる。僕は好きなラジオなしでは洗濯干しを続けられない。そんな洗濯干しを母さんは週6でやる。

部活の送迎の時、父さんは好きなイギリスのバンドの曲を流す。まだまだ、勉強不足で歌詞の

意味は分からないが僕はその曲が好きだ。その曲なしでは毎週水曜日の皿洗いは乗り超えられない。

六つ上の兄はラジオを聴いていた。なんかカッコつけてるなと思っていた。今では、毎週土曜日の洗濯干しの時、兄が教えてくれたラジオなしでは乗り超えられない。

そんなにゆるくはない僕の日々、家族なしではつまらない。僕は家族にどんな影響をあたえられるのだろう。

審査員のコメント

●渡邊委員

著者以外の登場人物が直接登場していないのに、家族がお互いになくはない存在であることを強く感じました。自分の存在意義やルーツを追求し始める十代後半特有の思いが、親しみやすいエピソードで語られる、オリジナリティの高い作品だと思います。

●大豆生田委員

皿洗いや洗濯などの家事を手伝う僕。その家事の大変さを通して、家族の存在がいかに自分にとって大切で愛おしい存在であるかをテンポよく語る完成度の高い作品。そんな「僕の日々」が「家族なしではつまらない」という言葉にぐっときます。

優秀賞

「『父の背中』」

しかま れん
山形県 志鎌 蓮さん 高校2年生

私が六歳の時、母は病気で急死しました。母と話した最後の時を私は今でも忘れられません。小さいころから母を亡くした私は、母の日や学校で行われる行事、お母さんと仲良くしているほかの家族を見ると、うらやましくて、さみしくてしかたがありませんでした。ですが、そんな気持ちを無くしてってくれたのが父でした。父は男手一人で私と姉を育ててくれました。私のさみしさに気づいた父はその日からいつも笑顔で接してくれて、私のさみしさはいつのまにか消えました。

小さいころから、ゴルフや空手、そして今も続けている野球などやりたいことはなんでもやらせてくれました。いつも夜遅くまで仕事をし、弁当を作ってくれたり、車でおくりむかえしてくれたり、絶対毎日つらいのに私の前ではいつも笑っています。私はそんな父の姿を見て、自分もこんな父親になりたいと思いました。私を産んでくれた、父、母に感謝しています。ありがとう。

審査員のコメント

●吉田委員

お父さんが頑張って、こんなに明るい家庭を作っていることが励みになりました。お弁当やお迎え、笑顔のエピソード、どれひとつとっても素晴らしく、男の子に「自分もこんな父親になりたい」と思わせるお姿を、同じ親として尊敬してしまいます。

●坂元委員

母親を亡くし、父親に育てられた高校生が切々と感謝を述べています。父親の人格は温かく立派であり、筆者による感謝や尊敬を説得力あるものにしていきます。父親だけでなく、「父、母に感謝しています」という末尾の文には感嘆しました。

優秀賞

「母さんへ」

北海道 鈞谷 悠太さん 高校3年生

突然だけどもめんなさい。僕はそんなに器用な方ではないので、色々、感謝とか文句とかうまく表現できないです。でも、たくさん伝えたいのです。

まず、ありがとうございます。僕が小学校4年生の頃、父さんと離婚してから今まで僕を育ててくれた事や障害ある僕を奇異の目で見ず、障害を理由に何をあきらめようとした時、「あきらめるんじゃない！他の人みたいに手と足と頭がついてるんだから、ただ人より努

力が必要なだけだよ」といつも言ってくれた事、本当に感謝してもしきれないです。

そして文句があります。僕にも親孝行させて下さい。母さんに親孝行できる隙がありません。どうしたらいいですか、このままだと親不孝者になってしまいます。お願いですからもっと家事、料理を僕に教えて任せて下さい。頑張りますから、これからももう少しお世話になります。親孝行もしますので、よろしくお願ひします。

審査員のコメント

●坂元委員

母子家庭の境遇で育ち、障害を有している高校生が母親に宛てた手紙であり、母親に対する深い感謝の念がひしひしと伝わってくる作品です。「文句があります。僕にも親孝行をさせてください。」以下の一節は感動的であり、胸を打ちます。

●渡邊委員

登場する母親はすべてを自分で背負っているようですが、子である著者の目を通すことで、より一層「支え合う」ことの大切さを感じさせます。感謝と文句(笑)は表裏一体の関係にあるんだと気付かされる素敵な作品でした。

優秀賞

「地域のみなさんに見守られて」

千葉県 森山 ひかるさん 中学1年生

私の兄弟は4人います。上に姉1人、兄2人、そして私です。母子家庭のこともあり、私たち兄弟は困ったとき、いつも地域のみなさんに助けられていました。

姉は、自転車に乗って遊んでいる時、洋服の一部が車輪に巻き込まれてしまい、転倒したことがあります。ただの転倒であればよかったのですが、壁に頭が激突したあと、そのまま顔をざらざらした壁に引きずるような転び方をしてしまい、大きな事故があったようにぐったり倒れていたようです。

偶然通った近所の人で連絡をくれ、母の帰宅後だったのですぐに病院に行くことができました。

1番上の兄は、家の裏でタクシーとぶつかる交通事故にあいました。裏に住んでいる方がその場面を目撃していて、警察への連絡や救急車の手配など行ってくれたそうです。その時、母はPTA活動をしていて、当時携帯電話もなかったの、張り紙がしてあったそうです。「どこでどんな人にお世話になるかわからないから、人には親切にすること。困っている人を見かけたら声をかけてあげること。」というのがこの頃からの口癖になったそうです。

2番目の兄は、習い事の初日の日、2回も下見をしたにもかかわらず、家から5分の場所に行くことができず、迷子になってしまったことがあったそうです。泣きながらうろろしているところを、近所の人で声をかけてくれて、その場所まで送り届けてくれたそうです。

そして私。小学生の時に不審者の人に声を掛けられたことがありました。その時、すぐ逃げ出して無事でしたが、家族をはじめ近所の人、マンションに住んでいる人たちが非常に心配してくれて、いろいろ対策をとってくれました。

今、家族がこうして元気に暮らしていることは、近所の人たちのやさしさのおかげと、感謝をしています。

私にできることは、笑顔で挨拶をすること、母にも言われるし自分でもそう思っています。姉や兄も笑顔で挨拶をしている場面を目撃したことがあるので、同じ気持ちなのだろうと思います。

こんなことしかできないけれど、長く長く、ありがとうの代わりに続けていき、いつか恩返しが何かの形でできるといいと思っています。

審査員のコメント

●伊久美委員

痛ましい事件、悲しい事件が日々報道される現代社会の中で、「日本の地域社会はこうあるべき!」と改めて実感できた作品でした。お母さまの口癖、「どこでどんな人のお世話になるかわからないから〜」…。その通り!私も、口癖にしたいと思います(笑)。

●吉田委員

親子も子供も地域の中で育てられ、守られてきたことが、具体的にイメージしやすい表現でつづられています。地域の良さがよくわかる文章です。

優秀賞

「私の夢」

よこた かな
京都府 横田 佳奈さん 高校3年生

私は看護師になりたいという夢があります。そして、同時に助産師の資格もとりたいて考えています。少子化といわれる世の中で、実際私の身近なところで小さい子どもがいる人はいません。赤ちゃんに触れ合ったり、小さい子どもと遊ぶのが大好きなので、このことはとてもさみしく感じます。私は母子家庭なので、小さいころ、保育園に入る前、入ってからも託児所へ行っていました。そこでは自分よりも小さい子、赤ちゃんもたくさんいました。また、小学生のころも放課後は児童館に行っていました。小さい子や、低学年の子と触れ合う機会が多

く、自然に子どもが好きになりました。そして産まれてくる赤ちゃんだけでなく、お母さんにも寄りそえるような助産師になりたいと思いました。今の日本は、少子化対策をにかけていますが、なかなか変わっていきえると思えません。それなら身近なところから、政府にまかせるだけでなく、地域や私たちができることを、小さくても見つけていけたら、不安をかかえているお母さんたちの力になれるのではないのでしょうか。社会で、地域で、子どもたちを育てていく。そんな日本になっていけたらとても素敵だと思います。

審査員のコメント

- 坂元委員
乳幼児や自分よりも年少の子供と触れ合うことによって、小さな子供に対する親愛感が高まったり、子育てに対する理解が深まっていくことを示唆する作品です。自分たち自身で子育てを支えていくべきとするメッセージは印象的でした。
- 大豆生田委員
ひとり親家庭で託児所、放課後の児童館で過ごすことが多い子ども時代だったが、そこで小さな子に出会ってきたことが、いまの助産師の夢につながっているという佳奈さん。赤ちゃんだけでなく、お母さんにも寄り添いたいという思いがステキです。

優秀賞

「母の母」

よしざわ なおみ
東京都 吉澤 奈生美さん 高校1年生

私は家族とよく喧嘩をします。些細なことでもすぐ喧嘩につながってしまいます。本当は喧嘩したくなくても、喧嘩につながるの、残念な気持ちになります。他の家族みたいに友達のような関係になりたいなと思い悩んだ時期がありました。その時に母方の祖母の病気が悪化して病院に運ばれました。危篤状態になってしまった祖母のところに行ったとき、母はその時、祖母の娘でした。私は母を私の母親だけで

はなく、祖母の娘という立場であることを忘れていました。祖母が亡くなって母が子どものように泣いている姿を見て、胸がきゅっと締め付けられました。その時の母の顔が目には焼き付いて、今でも忘れられません。私もいつか子どもができたなら母みたいになりたいと思います。母との時間を大切に過ごしていきたいと思います。

審査員のコメント

- 伊久美委員
母の母。思わず「？」となってしまった独特のタイトルの意味が、読み終えてずっしりと心に響きました。母親も娘だったんだ。当たり前のことなのにハッと気づいた瞬間から、お母さまへの愛情が深まっていく奈生美さんの気持ちが、とても上手に表現されていますね。
- 大豆生田委員
祖母の危篤に際し、母が子どものように泣く娘の一面に出会ったことで、その思いを深めていく気持ちがよく伝わってくる作品です。祖母と母の関係から、母と自分の関係を重ねようとする思いが温かく垣間見えてきます。